

オリンダ通信

第11号

「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」会報

共同代表: 松本敏之、大倉一郎
 事務局: 横浜港南台教会 秋吉隆雄
 〒234-0054 横浜市港南区港南台 7-8-29
 Tel 045-833-5323 Fax 045-833-6616
 郵便振替口座番号: 00210-2-97571

荒れ野に花が咲く日

小井沼眞樹子

★荒れ地

アルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会を初めて訪問したのは、1996年でした。その年の8月初めに、メソジスト教会世界会議がリオで開催され、その女性大会で世界中から集った500名の女性たちと共に過ごした5日間のある日、昼食のテーブルで向かい合わせたジャニさんと言葉を交わしました。彼女が貧しい地区の教会の信徒代表であること、その教会を創立したアメリカ人宣教師の夫は4年前に、不慮の事故で亡くなったと話してくれました。「マキコ、一度見に来ませんか？」それが、アルト・ダ・ボンダージ教会との交わりの発端でした。

1997年—98年には、日本基督教団の派遣宣教師として松本敏之牧師一家がその教会で奉仕され、友好関係がさらに強まりました。2002年に、中島保壽牧師ご夫妻と訪問した際、神学校を卒業したばかりの青年イヴァン牧師に出会いました。イヴァン牧師は、教会や信徒の方々の家を訪ねて回った際、隣接する荒れ地を指して、「これは教会の土地で、私たちはここにコミュニティ・センターを建設する夢を持っています」と話してくれました。

それ以後も、日本からの訪問客といっしょに何度もこの教会を訪れましたが、その土地には身の丈以上の雑草がうっそうとおい繁るばかりでした。



★種まき

2009年3月に、単身オリンダへ赴任した時、こ

の荒れ野に花を咲かせることが私の使命のひとつではないか、という思いがありました。

しかし、日本語を全く使わず、日本人が一人もいない教会での奉仕を始めてみると、圧倒的な不自由と孤独、そして現実問題に少しも対処できない無力と向き合わされました。自分の健康保持すら危うくなり、コミュニティ・センター建設問題にはほとんど手が付けられないまま、最初の2年が過ぎ去りました。

以前はアルト教会の所有地だったその土地は、メソジスト教会ノルデスチ教区のものとして召し上げられ、アルト教会とは無関係の若いG牧師がその管理責任を負わされて、すでに5年経っていました。その間、何ひとつ具体的な建設計画が起こされなかったのも、私の赴任後に聞こえてくるのは、G牧師への不満と不信任の声ばかりでした。

2010年の年末、教区牧師のクリスマス親睦会に参加した折、G牧師と親しく言葉を交わす機会がありました。私がオリンダにいる間に、できる限りあなたを助けるから、いっしょにコミュニティ・センター建設に取り組みましょう、とまず彼女の背中をひと押し。翌年前半は私が体調を崩して休養を余儀なくされ、後期になってやっとG牧師と個人的な会合を始めました。「アルト地区の多くの人たちが、文句を言っているのを知っている。けれど、どうやってそんな大事業を進めていくのかやり方がわからない、資金ぐりのあてもない」と彼女は苦しい胸の内を話してくれました。若干35歳。夫は未だ勉学中で無職。実母から放置された幼児を2人養子にして子育てしている母親でもあり、ある教会の主任牧師、メソジスト神学校の事務局も務める超多忙人です。

私は、まず建築委員会を結成しようと提言しました。G牧師と私、イヴァン牧師、クレシェの園長Rさん、それにもう一人の牧師が名前を連ねて、5名の建築委員が揃い、月に一度会合を持つようになりました。

しかし、その建築委員会は実際あまり機能しなかったのです。というのもG牧師はほとんど一人で

諸々の実務を処理して、委員会の合議にかけて決め、決まったことを実行していくというやり方を知らないかのようにでした。また委員会のメンバーも建築物の設計図を見ても、検討の仕方が分からない、アイデアがない、実際多忙で実務の分担ができない等々、限界が大きくありました。

G牧師に限ったことではなく、ブラジルでは未だ民主主義の実践体験が浅く、そのノウハウが身についていないのではないかと思わされることよくあります。まるで独裁政治のように、権力者（中心人物）が一人で物事を決め、推し進めていく。そこには、有能なスタッフの不足が一因としてあるようで、一概に批判できませんが。

さて、G牧師がアメリカのメソジスト教会に援助を申請したところ、10数名のボランティアグループが、数ヶ月後に建設作業のワークキャンプとして送られてくることになりました。そこで、そのグループが来る前に、土地の整地と基礎工事を済ませておくことが必要でした。そのための見積もりも取り、資金も備わっていたのですが、G牧師が委員会を決めたとおりに行動しなかったのです。折角送られてきたアメリカ人ボランティアは、現在使っている園舎のペンキ塗りをして帰国しました。イヴァン牧師は怒って、彼女は不適任だとビスパ（監督）に直訴し、建築委員会は空中分解してしまいました。

そんなことがあって、結局、この大きな建設事業はその後ほとんどG牧師と教区の会計士を中心として進められました。

実際、私もオブザーバーとしていっしょにいましたが、詳細な現地事情や法的手続きなどの内容が私にはよく理解できず、物事が一向に進展しない理由がわからず、「忍」の一字で見守ってきました。メソジスト教会総会でこの建設案が認可され、私の第1任期終了前（2012年2月）にようやく、募金パンフレットができ、宣伝用DVDも作成され、国内、国外に向けて募金活動が始まりました。それで、2年間保留しておいた建設支援献金6万へアイス（約280万円）を提供して一時帰国しました。6月初旬、私がまだ日本に滞在中に、工事を開始したとのメールをG牧師から受け取り、戻ってみると、荒れ地が整地され、基礎工事に取り掛かっていました。非常に大きな一歩でした。

G牧師は一人で身を粉にしてよく働きました。ブラジル内の他州の教会へも出かけて行ってキャンペーンをし、募金用パンフレットには献金の額を種に例えて、カラシ種（20へアイス）、スイカの種

（35へアイス）、アボガドの種（50へアイス）として、毎月、銀行口座に振り込むよう協力を求めました。

★協働者

建設工事の工程は4段階に分かれていました。アメリカのボランティアグループはその後、2013年前期、第3工程まで異なる州から3回に渡って送られてきて、作業現場で働きました。ブラジル国内はもとよりドイツやオーストラリアからの献金も届き、この東北伯（ノルデスチ）の片隅に、子どもの園を実現するために国際的な連帯の輪が広がっていきました。

私は、言葉の限界で建設工事の具体的な進展過程にはほとんどタッチできないままでしたが、G牧師に寄り添い、励まし、日本からの支援金を着実に届ける役を果たしました。それは、日本の多くの支援者の方々の祈りと具体的な献げ物の大きな効用です。

「この姉妹関係は神様のみ心が実現するために大切な任務を果たしていると思う、まるでマリアとエリザベト（ルカ福音書1章）のようね」と私が言うと、彼女は驚いたように「マキコ牧師がマリアでしょ！」と返答するので、「とんでもない、あなたがマリア、私はエリザベトよ！」そうですとも、G牧師と私は30歳も年齢の差があるのですから。アルト・ダ・ボンダージのマリアとエリザベトは、神のみ心の実現のために、それぞれの分を精いっぱい果たしたのでした。



★毒麦

日本文化をひとことで特徴づけるとき「恥の文化」と言われていますが、ブラジルには「嘘と盗み

の文化」が根底にあります。それは長い植民地支配の負の遺産と言えましょう。今回のサッカーのワールド・カップ大会でもブラジルFIFAの多額の資金横領が発覚し、多くの反対デモ行動が続きました。政治権力者や、企業経営者ばかりではなく、庶民の日常生活にまで「嘘と盗み」は根強くはびこっています。

コミュニティ・センター建設工事も、第3段階までは、比較的順調に運びました。しかし、建物の外枠が出来上がり、いよいよ最後の内装工事に入る前に、工事責任者が、労働者の賃金を未払いのまま、多額の資金を持ち逃げするという事件が起こったのです。怒った労働者たちは労働裁判所に訴え、総額1万3千へアイスの支払いを教区相手に要求してきました。施行者を選んだG牧師はまさお！しかし、労働者たちにも人数に嘘の供述があり、結局控訴は成立しなかったのです。

そんなことがあって2013年6月以来、工事は暗礁に乗り上げ、一時ストップ。新たな資金ぐりと新しい建設業者の選定をしなければならなくなりました。

★幻の落成式

建設工事の最終段階は難航を極めました。9月から新しい施行者と資金調達を得て工事が再開したものの途中でなんども資金が不足しました。労働者の質はよくなく、見張りがいないとあまり働いていないという苦情が聞こえてきました。さらに11月頃からインフレ経済が起こり、材料費、労働賃金ともに値上がり、資金不足に拍車がかかりました。この間、「共に歩む会」や篤志家の友人と連携してつぎ込んだ資金援助は相当な額になります。しかし、会計処理は日本人の基準から見るとかなりずさんで、催促しないと領収書が発行されなかったり、センター建設専用の銀行口座が、銀行側の不備でよく機能しなくなったとして、教区の一般会計の口座に振り込むようになりました。一般会計に入った建設資金が、他の必要に流用されるのでは、と疑心暗鬼にもなります。

G牧師が一人で駆けずり回って材料、備品の購入をしていましたが、幼子を抱えながら一人では効率よく働けないのは、察して余りあるものがありました。

12月末までに仕上がるはずが、結局でき上がりませんでした。

さらに理解に苦しむことには、教区の牧師の人事異動が12月に発表され、なんとコミュニティ・センター責任者であるG牧師が、完成間際のこの機

に及んで、他州の他都市の教会に転出になったのです。人事権を持っているのはビスパ（監督）です。しかも、代わりの責任者が選定されず、年末からセンター建設工事は具体的な責任者が不在のまま仕上げねばならなくなりました。会計士のM氏がとりあえずG牧師から仕事を引き継いだ形となりましたが、彼は信徒で別に職業をもっていて、G牧師のように日中動けません。

さて、次の目標は、私が日本で支援者の人々に報告するために3月末の一時帰国前に完了し、落成式をするようにと設定していたのですが、結局それも果たせませんでした。

5月初め、まだ日本に滞在中にやっとジャニさんからのメールで、ついに工事が終了したと連絡がありました。マキコがレシーフェに戻ってきてから、関係諸氏を招待して落成式を盛大に行おうとビスパが言っているとのことでした。

私がレシーフェに帰り着いたのは6月2日。今に至るまでまだ出来上がった建造物を見ていないのですが、教室や食堂のテーブルや椅子の購入、棚の設置、音響設備、園庭の整備など実際に保育活動ができるようになる前の仕事がまだ山のように残っています。

また、市政府との関係では住所変更の手続き、給食の配給依頼、園庭の遊具の移動、などが未解決のままです。これらの市政府がらみの諸手続きは、いつもかなり時間がかかるとのこと。

折しも、ワールド・カップとフェスタ・ジュニナが重なり、ブラジル中騒然としていて6月に落成式を行える見通しが殆どありません。

現在、ビスパの裁断によって次なる目標は10月中旬ということに。彼女が落成式実施のために実行委員会をつくり、推進すると言っています。果たして、その通り事が運ぶでしょうか？

これが、ブラジルの現実です。それでも、この地に花が咲く日は、そう遠くないはずです。この施設が完成すればこの地区の多くの子どもたちが、安全な環境で、楽しく子どもに相応しい時間を過ごすことができることを思うと、労苦に倍加する喜びがこみあげてきます。

眞樹子師の連絡先（通信の読後感を待っています）

住 所： ～ 省略 ～

Boa Vista, Recife-PE 50050-200 BRASIL

電 話： ～ 省略 ～

メー ル： ～ 省略 ～

編集後記 T. S (横浜港南台教会員)

春の花々が一斉に咲き始めた3月末から一時帰国された真樹子先生は、5月4日の礼拝説教のご奉仕をして下さいました。「大変なこと、つらいことはたくさんあるのですが、実は皆さんが思われているほどしんどくはありません。その中で兄弟姉妹たちの愛に満ち溢れた信仰生活ができる喜びがあるからです。」と語られた言葉が心に残りました。

赴任されて5年の歳月が過ぎようとしています。その間のご苦労は計り知れませんが、このメッセージが全てを言い表しているように思いました。

どうか10月に予定されている落成式を無事執り行う事が出来ます様に、そしてセンター内から響きわたる子供たちの楽しそうな笑い声を聴くことが出来ます様に、真樹子先生のご健康と合わせて心からお祈り申し上げます。